

# 1 国語

\*\*\* 開始の合図があるまで、開いてはいけません \*\*\*

試験が始まるまで、下の〔注意事項〕を読んでおいてください。

〔注意事項〕

- 問題用紙は表紙をふくめて8枚、解答用紙が1枚あります。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 国語の試験時間は、45分です。
- 印刷の見えにくい場合のほかは、質問を受けません。
- ホッチキスは、はずしてもかまいません。
- 必要なものは、えんぴつ、消しゴム です。

※問いに字数制限がある場合は、句読点等をふくみます。

㊦ 次の各問いに答えなさい。

問一 ――線部①く③について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

・手紙を①ユウビンで送る。

・予定を変更して②タンシユクする。

・作家の③生誕記念の催しにでかける。

問二 次の慣用句のうち、( )に共通して入る体の一部を表す漢字を答えなさい。

① ( )をあかす …… だしぬいてびつくりさせること。

( )につく …… あきていやになること。

② ( )がおどる …… 期待でわくわくすること。

( )におさめる …… 心の中にしまいこむこと。

問三 次の漢字を組み合わせることができる二字の熟語を答えなさい。

(例) 木工糸毎 Ⅱ 紅梅

① 心 心 日 田 立 Ⅱ ( ) ( )

② 才 才 口 貝 Ⅱ ( ) ( )

問四 次の文には、言葉の使い方に誤りがあります。①・②の書き出しにつながるように、正しく書き直しなさい。

私のチームの目標は、全国大会で優勝したい。

①私のチームの目標は、

②私のチームは、

問五 次の文を、修飾語と修飾される語とのつながりがはっきりするように言葉を並びかえ、一文をすべて書きなさい。

生まれたばかりの公園に捨てられていた子犬を拾う。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

### 子どもたちの味覚があぶない

いま、日本の子どもたちの味覚があいまいになっています。そこで私は、子どもたちに①ほんものの味を教えることがいまこそひじょうに重要だと主張しています。味覚教育をぜひ食育の中に入れてほしいものだと考えているのです。ある\*<sup>1</sup>シヨッキングな味覚実験があります。かつお節でおいしい出汁<sup>だし</sup>をとりまします。それと同じぐらいの味の濃<sup>こ</sup>さにして、グルタミン酸ナトリウムを入れた液体をつくりまします。この二種の液を、子どもたちに舐<sup>な</sup>めさせて「どちらがおいしいか」と聞いたそうです。どういふ答えになったでしょうか。

多くの子どもたちが、ほんもののかつお節の味とグルタミン酸ナトリウムの味を区別できなかったそうです。これにはたいへん驚<sup>おどろ</sup>きました。なぜかといったら、多くの子どもたちの舌がグルタミン酸ナトリウムの味に画一化されているからです。

これはとても困ったことです。日本の子どもたちの舌が「この味だけでも満足」ということになったら、これからは舌で考えることができない人間になってしまいます。②舌<sup>した</sup>でものを考えるのはひじょうに大切なことです。食べることは生きることの基本であつて、その生きる基本の入り口のところがみんな同じになってしまつたら、どうなるのでしょうか。個性を失<sup>う</sup>つて特徴<sup>とくちょう</sup>ある人間はできなくなつてしまふでしょうし、味気のない、同じような感覚をもつた人間しかできなくなつてしまふかもしれません。とくに幼児では、ひよつとしたら脳の発達まで影響<sup>えいぎやう</sup>するかもしれません。そうではなくて、人間はさまざまなものを食べて、「これはおいしい」とか「これはまずい」という判定を舌と頭で考えながらおこなうのが本性で、それによつてはじめて食のすばらしさを知るわけです。

みんなが同じ味で画一化されてしまつたら、最大公約数的な人間しかできず、このままでは、子どもたちの将来、ひいては日本の将来にとつてもよくないことになるのではないかと私は心配しています。

③また別の実験ですが、砂糖の1%溶液<sup>ようえき</sup>、塩の1%溶液をつくりまします。砂糖の1%溶液は甘<sup>あま</sup>く、塩の1%溶液はしょっぱい。これをどんだん水で薄<sup>うす</sup>めていきます。そして甘さやしょっぱさを感じなくなった濃<sup>のうど</sup>度、それを閾<sup>いきち</sup>値というのですが、それを測<sup>はか</sup>ります。するといまの若い人は、昔の人よりも、はるかに味覚が鈍<sup>どん</sup>感<sup>かん</sup>になっていることがわかるそうです。

ところが、グルタミン酸ナトリウムの1%溶液をつくつて、どんだん薄<sup>うす</sup>めていきます。すると、日本の子どもたちは、こちらに對<sup>たい</sup>してはひじょうに敏感<sup>びんかん</sup>になっていて、グルタミン酸ナトリウムに對する味覚器<sup>みかくき</sup>（センサー）がとも\*<sup>2</sup>鋭敏<sup>えいびん</sup>になっているそうです。自然のうま味に對しては鈍感<sup>どんかん</sup>、人間がつくりだした新しい調味料には敏感<sup>びんかん</sup>になっているということは、いかに日常からそのような調味料で味覚がつくられているかということなのです。

自然の味がわかるということは大切なことです。民族本来がもっている味がわかるためには、その民族の食を日常的に食べていることが必要なのです。そういうことから考えて、日本の子どもたちはいま、味覚の面でも重要な状況<sup>じやうきやう</sup>におかれているといえましよう。

\*<sup>3</sup>元凶<sup>げんきゆう</sup>はファストフードすなわちレトルト食品、コンビニ弁当、インスタントラーメン、スナック菓子<sup>がし</sup>などのようですが、④そんなものばかり食べて育つたら、個性のない子どもたちがぞくぞく出てくるかもしれません。意外にみんなこのよ<sup>よ</sup>うな味覚教育に気がつかないのですが、食育の中でほんものの味を教えることを怠<sup>おろそ</sup>かしてはいけないと私は思っています。

### 民族文化を学ぶ必要性

日本ではいま、「食育をしつかりやりなさい」と国が、食育基本法などを制定して地方に呼びかけていますが、国そのものもひじょうに重要なことをする必要があると私は思います。それは、小学校や中学校の授業の中に日本のすばらしい民族文化を教える時間を入れてやることだ、と私は考えています。

その民族にしか通用しない文化、あるいは語れない文化を民族文化といいます。ヨーロッパでは、二七カ国が統一してEUが成立し、パスポートは要<sup>い</sup>らなくなり、お金はみんなユーロですむようになりました。ところが一つだけ、ぜつたいにグローバル化<sup>グローバル</sup>してはいけないものを彼<sup>かれ</sup>らは知っています。⑤それが民族文化<sup>ぶんしやう</sup>なのです。

民族の違<sup>ちが</sup>いの一つは、異なつた文化によつて成り立っていますから、文化を失つた民族は存在価値がなくなるのです。たとえば日本文化がすべてアメリカ化したら、どうなるのでしょうか。そうなつたら、日本人は文化を失い、民族とはいえない状態<sup>じやうたい</sup>になってしまいます。

ドーバー海峡<sup>かいきやう</sup>は三〇キロくらいですから、フランスからイギリスへは泳いで渡<sup>わた</sup>れます。泳いでいって、フランス人がイギリスの海岸に着いて「ああ、疲<sup>つか</sup>れた。誰か水をもつてきてちょうだい」と話しても、たった三〇キロしか離<sup>はな</sup>れていないのにイギリス人には何を言っているのかぜんぜんわかりません。使っている言語が英語なのに、話しかけられた言葉はフランス語ですから。教養としての意味なら別として、イギリス人は、別にフランス語を知らなくてもいいのです。自分たちの文化ではないし、自分たちの文化をしつかり守ればいいのです。そういうのが民族文化の一例なのです。

日本の子どもたちは、せつかく日本に生まれてきたのですから、日本のすばらしい民族文化、すばらしい食文化を、小さいときから知らなくてははいけません。ところが、現実<sup>じやうじつ</sup>はそれらを教えられることなく、どんだんアメリカ化されていくのです。民族に与<sup>あた</sup>えられた教育とはそんなものなのでしょうか。異国の文化を教えるほうが優先されるものなのでしょうか。

たとえば、「畑」と「畠<sup>はたけ</sup>」という字のちがいを知っていますか。これは両方とも漢字ではなく、国字つまり日本人がつくつたすばらしい漢字なのです。この二つの国字の意味はまったく違っています。

ところが、日本人の中学生、高校生に「この字の違<sup>ちが</sup>いは何ですか」と聞いたたら、わかる生徒<sup>せいと</sup>は一〇〇人中何人いるでしょ

うか。ほとんどいないと思います。そのかわり、「畑を英語で何というの」と聞いたら、すぐに「Field」あるいは「Farm」などと答えます。日本はいまそんな国になっているのです。

ちなみに「畑」は火が入っていますから、焼畑のことで、畠は白が入っていますから、焼いてない畑のことです。

そういうことをいまの子どもたちには教えないで、英語ばかり教えようとしているのです。民族文化とは、その民族にか語れない、通用しないものなのですから、民族文化のおもなものは、このような「言葉」といまひとつは「食」なのです。宇田川悟著『フランスはやっぱりおいしい』（TBSブリタニカ）という本が出ています。フランス料理がおいしいことは、世界的に有名です。しかし、イギリス人はフランス料理をけっして真似ません。なぜかというところ、イギリス人は自分たちの固有の民族文化をもっているから、そんな他国の食文化などは関係ないということなのです。

しかし、いまの日本人は、子どもから大人までハムは食べるし、チーズは食べるし、ギョウザは食べるし、キムチも食べる。パスタ、スパゲティもおてのもの。どこの国の食なのかまったくわからないほど多彩な食生活をしています。それはやはり本来のこの国のすばらしい文化を教えていないからだ、私は思います。日本でそのような民族文化の教育ができて、たとえば早い年齢から和食のすばらしさを教えれば、その子はいずれ日本に生まれてきたすばらしさを感じることができるとでしょう。⑥民族文化というのはこのようにひじょうに大切なものです。それを一日も早く子どもたちに教える必要があるのです。

「いのちをはぐくむ農と食」(小泉 武夫)より

〈注〉

\*1 ショッキング：衝撃を与えるようす。

\*2 鋭敏：感覚がするどいようす。

\*3 元凶：いちばんもの、悪い原因のこと。

問一 — 線部①「ほんものの味を教える」とありますが、筆者は学校でこのようにすることを何と言っていますか。四字でぬき出して答えなさい。

問二 — 線部②「舌でものを考える」という比喩は、どういうことを言っているのですか。三十字以上、四十字以内で説明しなさい。

問三 — 線部③「また別の実験」とありますが、この実験から最終的にわかったことは何ですか。そのことがわかる一文をぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問四 — 線部④「そんなものばかり食べて育ったら、個性のない子どもたちがぞくぞく出てくるかもしれません」とありますが、これとほぼ同じ内容を述べた一文をぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問五 — 線部⑤「それが民族文化なのです」とありますが、筆者が「民族文化」の例として本文中であげているものを、それぞれ一語で二つぬき出して答えなさい。

問六 — 線部⑥「民族文化というのはこのようにひじょうに大切なものです」とありますが、これについて安子さんと梅子さんが次のような会話をしています。この会話文を読んで、後の問いに答えなさい。

安子：筆者は、文章の最後のところで、「ひじょうに大切なもの」と言って、民族文化の大切さをまとめているね。日本にも固有の文化があつて、大切にされてきたのよね。

梅子：でも筆者は、日本の子どもたちがその素晴らしさを知らないままであることを心配しているわ。

安子：そうね。今の学校では民族文化よりも（A）を教える方が先になっているという指摘をしているね。だから日本の子どもたちが、日本の文化について語ることができない。

梅子：私の学校の友達にイギリス人の子がいるんだけど、（B）。

安子：私は日本で生まれて育ったけど、小さい頃からパスタとかピザも好きだわ。日本にいながらにして、多様な食文化を味わえることも、私たちの生活を豊かにしているとも言えると思うな。

梅子…世界の（C）がすすんでいるということね。

安子…そう。ちょっと前の授業で「これからは多様な価値観の人たちと生きていかなければならない社会になっていく。」という内容を習ったけど、そのためには、筆者の言うように民族文化を大切にされた教育を進めると同時に、積極的に異国の文化を理解するということも大切になってくるわね。

梅子…私は高校生になったら夏休みに留学してみたいから、中学生のうちから両方の勉強を頑張りたいな。

(1) (A)・(C)には五字程度の語句が入ります。本文中から探し、それぞれ答えなさい。

(2) 本文の内容をふまえて、(B)に入る言葉として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア お茶を飲むときは、緑茶じゃなくて、やっぱり紅茶を好んで飲むって言ってたわ。  
イ 子どものころからトムヤムクンが大好きで、将来的にはタイに移住するらしいわ。  
ウ 近所のおばあちゃんが作ってくれる豚汁が最高で、毎日食べたいって言うてるわ。  
エ お家は中華料理屋さんで、イギリス人のお父さんが作るチャーハンが母国でも人気らしいわ。

(3) 線部「中学生のうちから両方の勉強を頑張りたいな」とありますが、あなたなら中学校生活の中でどのようなことを頑張りますか。「両方の勉強」が何をさすかを明らかにした上で、具体的な例とともに書きなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学一年生の「啓太」は母と二人で暮らしている。「啓太」の同級生「晴子」は、父と祖母の「烈子ばあちゃん」との三人で暮らしていたが、最近「烈子ばあちゃん」の姿が見えない。

夏休みのある日、「啓太」は「晴子」に、町を見渡すことの出来る「展望公園」に一緒に来てほしい、と言われ、次の日の夜、一緒に行くことになる。

「ついたよ」

そこは短い草が絨毯のように茂った野原だった。空が近い。星が鮮やか。景色は展望台よりも遠くまで\*1 見はるかすことができた。

「うっお。何ここ、すげえ！」

思わず声を上げる。生まれたときからこの町に住んでいるくせに、展望公園には何度となく来ているのに、こんな場所があるなんて知らなかった。

「啓太くん、お疲れさま。こっちに座ろう」

晴子はリュックサックからレジャーシートを出して、手慣れたように敷いた。リュックからは、アルミホイルで包まれたでかいおにぎり二個と大きな水筒、紙コップも出てきた。

「晴子、こんなの背負って来てたの」

「うん。ほら、おにぎりどうぞ」

正直腹が減っていたので、嬉しかった。晴子と並んで座り、眼下に広がる景色を見ながらおにぎりを頬張る。塩が効いたおにぎりはまだほんのりと温かくて中には甘い煎り卵が入っていた。旨い。

「ありがと、晴子。①なんかこれってすごい贅沢だな」

目を奪われる景色を独り占めしながら旨いご飯を食べることが、こんなにも満足感を与えてくれるなんて思わなかった。

「それに、煎り卵のおにぎりなんて、初めて食べた。これ、好きだ」

「よかった」

晴子の声が嬉しそうに跳ねる。あのね、この場所も、おにぎりも、おばあちゃんが教えてくれたんだよ。ここからの夜空が一番、星に近いってことも。

「……なあ、烈子ばあちゃん、どうしたんだよ」

「もういい加減、教えてくれてもいいだろ？ 訊くと、晴子は小さくほとりと言葉を落とした。

「施設に、いる」

「施設って、なに」

「……\*2 認知症なの。一年くらい前から少しずつ様子が変わっていったの。どんどん酷ひどくなってきて、お父さんがとうとう施設に入れちゃった」

大きな口を開けて、晴子はおにぎりを頬張る。ほったたをリスみたいに膨ふくらませて\*3 咀嚼そしやくをする晴子の目じりが少し光った。俺はそれを見ないふりをして、おにぎりを齧かじる。

ゆつくりと飲み込んだ晴子が続ける。  
「中々入ることできない、すごく人のある施設なんだって。死ぬまで大切に看みてくれるって。そんなところにすんなり入っておばあちゃんは運がいいって、お父さんは言ってた」

② 言葉が出てこない。晴子と並んで帰っていた広い背中を思い出す。大きな手はいつも、晴子の小さな手を握にぎっていた。

「烈子ばあちゃんがなくなつたから、晴子は変わろうとしたの？」  
少しの間があつて、晴子が頷うなづく。

「なかなか、うまくいかないね。ひとと付き合うのも、ひとに言いかえすのも全然加減が分からない。初めての世界は、あたしには厳きびすぎる」

「初めてって？」

晴子は右手で目の前を指差した。小さな光の粒つぶをたくさん霽こぼしたような景色が広がっている。こうして見ると、思っていたよりも町は栄えているのかも思えないと思う。

「暗くてよく分からないかもしれないけど、この町って、すり鉢ぼちみたいな形をしてるんだ。向こうの山と、いまあたしたちのいるこっちの山が緩やかに繋がっていて、その中にあるの。あの辺りの光の集合体は、すり鉢の底かな」

晴子の喋り方は、耳に優しい。B 雑音なく伝わる。うん、と頷いた。何となくイメージが湧く。

「おばあちゃんね、ここは少し大きな水槽なんだよって言ったの。この町は水槽だって」

頭の中のすり鉢が、自分の家の玄関に置かれた金魚鉢きんぎょぼちにすり替かわった。金魚鉢の底には色とりどりのビー玉が沈しずんでいる。あの幾つもの光はビー玉の輝かがやきなのだと思えてくる。

「そしておばあちゃんは、私は晴子のチョコレートグラミーになってあげるからねって言ったの」

\*4 マウスブルーダーって、ここと？」

C 晴子が目をぱちくりさせた。俺が知っているとは思わなかったらしい。\*5 あれから調べたんだ。どこが晴子と似てるのかなって思つて。親が口の中で稚魚ちぎょを育てて外敵から守る魚だつて、\*6 ウィキペディアに書いてた。そう言う、そういうところが頭がよくなる理由なのかなと感心したように晴子は頷く。

「俺、\*7 あのととき晴子は卵から孵かえつたんだと思つた。でも、ちょっと違ちがつた。③ 晴子はずっと、烈子ばあちゃんの口の中にいたんだな」

晴子が、笑う。頬ほおに優しい窪くぼみができる。

「おばあちゃんが、この世界からあたしを守ってくれた。あたしを捨てたお母さんから、騒さわぎを馬鹿にする世間から、全部から」

晴子が夜空を見上げる。それから、D まるで昔話をするような口調でそうつと続けた。

「この水槽の中で哀かなしい思いをしないように、辛い思いをしないように、私が守つてあげる。焦あせらなくつていいんだよ。あんなのペースでいい。いつか自分で旅立てると思えるその日まで、私の中にいたらいんだよ」

ああこれはきつと、烈子さんの言葉だ。烈子さんは何度となく、晴子に言つて聞かせたんだろう。俺の知っている烈子さんの口調じゃないけれど、そう思つた。

そして同時に、\*8 子どもを怒鳴り散らしていた烈子さんを思い出す。晴子を泣かせる奴はこの私が容赦ようしゃしないからね！絶対、いじめるんじゃないよ！

「おばあちゃん、認知症になつたいまも、あたしを守ってくれてるんだよ。晴子は渡さない、晴子を殺そうとしたあんたは死んでも許さないってあたしに向かつて怒鳴どなつて、暴れるの。あたしはお母さんじゃなくて晴子だつて何度言つても、分かんないんだよ。呆あきれちゃう」

④ 晴子の声が少しだけ潤む。

「おばあちゃんの愛情あいきつて、『普通』とは少し違うんだろうね。ひとから悪く言われる部分もあるんだと思う。でも、あたしはその愛情のお陰かげで幸せに生きて来られた。誰にどう言われても、あたしはそれに感謝かんしゃしたい」

泣きそうな晴子に引きずられたせいなのか、それとも別のひとの面影おもかげがよぎつたせいなのか、鼻はなの奥おくがツンと痛む。同時に喉のどの奥からこみ上げてきた熱いものを押し込こめるために、おにぎりの残りを全部口に押し込んだ。げほげほと噎むせ返かえると、晴子がすぐに紙コップを差し出してくれる。

「ご、ごめん。ありがと」

苦しみのせいで、涙目になる。晴子は、美味おいしそうに食べてくれて嬉しいよ、とおどけたように言った。  
一息ついた後、ふたたび寝ねころんだ。星が幾つも煌きらめいていて、その中に夏の大三角形を見つめる。晴子に教えると、教科書通りだねと指先で星を辿たどつた。

それからしばらく無言で眺ながめていると、晴子がそろりと喋りはじめた。あたしはこれから、おばあちゃんの口の中から出て、ちゃんと生きていく。だけどき、啓太くん。難しいね。生きていくって難しいよ。

ああ、難しいよな。俺も、難しいって思う。しんどいって時々思うし、ムカつくこともある。世の中って、どんどん厳きびしくなつていつてる気がする。でもそれが晴子の言う、世界に出るってことなんだろうな。

ああ、そっか。そういうことだね。さすが、啓太くんはこの世界でちゃんと泳いでるだけあるね。どうだろうな。ちゃんと、ではないと思うよ。

そんなことないよ。あたしには、啓太くんがとても眩しいよ。そんな啓太くんが辛くても泳いでいるんだったら、あたしも泳がなくなっちゃいけないって思うもの。

ゆつくりと紡がれる晴子の声が、俺の音が、**E** こぼりこぼりと気泡のように夜空に溶け込んでゆく。だんだんと、自分が水槽の中で揺蕩う魚になった錯覚に陥る。ビー玉や水草の間で揺らぎながら、生まれては消える水泡を眺めている、そんな感じ。「**⑤**この水槽の向こうにはもっとたくさんさんの水槽があるんだよね。水槽どころか、池も川も、海だってある。いちいち怖がってたら、生きていけない。あたしたちはこの広い世界を泳がなきゃいけない」

**⑥**こぼこぼ。こぼこぼ。柔らかな音の向こうに、縞模様の入った栗色の魚が泳ぎ始める。魚は星屑の散らばる夜空を旋回し、星の描く三角形を潜っていった。ゆつくり、ゆつくりと。

しばらく空を眺めて、俺たちは山を下りた。帰り道はとても早く感じた。それは、晴子が俺のゲーム話を興味深そうに聴いてくれたからかもしれない。晴子もやってみろよ。なんなら俺が操作教えてやるし、と言うと、機会があったらぜひ、と笑った。

「夜空に泳ぐチョコレートグラミー」(町田 そのこ)より

〈注〉

\*1 はるかに見渡すこと。

\*2 脳の病気や障害など様々な原因により、認知機能が低下し、日常生活が難しくなる状態。

\*3 食物を細くなるまでよくかむこと。

\*4 一定期間、親が子を自らの口の中で育てる種類の生物のこと。

\*5 夏に新聞配達のアルバイトを始めた「啓太」は「晴子」の家に新聞を配達した時に、大きな水槽に目を奪われる。水の中には「チョコレートグラミー」という熱帯魚が泳いでおり、「晴子」は、自分と「チョコレートグラミー」は似ている、と言った。

\*6 インターネット上で利用できる百科事典。

\*7 中学一年の夏休みに入る少し前、同じクラスの男子生徒に「烈子ばあちゃん」のことを悪く言われた「晴子」がその男子生徒に殴りかかったときのこと。

\*8 「烈子ばあちゃん」は「晴子」が小学生の頃から朝夕校門まで「晴子」を送りむかえし、同級生が「晴子」にちよっかいをかけたたり泣かしたりした時には火を噴くように怒り、追いかけてくるので、同級生たちにとって怖い存在だった。

問一 — 線部①「なんかこれってすごい贅沢だな」とありますが、「啓太」はどのようなことを「贅沢」と感じているのでしょうか。その答えとして適当な部分を本文中から三十字以内でぬき出して答えなさい。

問二 — 線部②「言葉が出てこない。」とありますが、この時の「啓太」の気持ちとして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「烈子ばあちゃん」が人気のある施設に入ることが出来たことに驚いている。
- イ 「烈子ばあちゃん」を施設に入れた「晴子」の父親の行為に怒りを覚えている。
- ウ 「烈子ばあちゃん」と引き離された「晴子」の悲しみの大きさを強く感じている。
- エ 「烈子ばあちゃん」が「晴子」のそばにいないという事実を受け止めきれずにいる。

問三 — 線部③「晴子はずっと烈子ばあちゃんの中のみにいたんだな」と「啓太」は言っていますが、「啓太」の言う「烈子ばあちゃん」の口の中にいた」という言葉は、どのようなことを意味しているのでしょうか。「晴子がくこと。」の形で二十五字以内で答えなさい。

問四 — 線部④「晴子の声が少しだけ潤む。」とありますが、この時の「晴子」についての説明として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「烈子ばあちゃん」の変わり方はた様子を思い出し、悲しんでいる。
- イ 「烈子ばあちゃん」の自分への変わらぬ愛情を感じ、切なくなっている。
- ウ 「烈子ばあちゃん」の症状が進行していることを、受け入れられないでいる。
- エ 「烈子ばあちゃん」と離れてしまったことを、がまんできないことだと感じている。

問五 ―線部⑤「この水槽」がたとえているものについて説明した次のア～エから、最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 様々な人々がそれぞれの思いを抱きながら暮らしている小さな町。
- イ 自然から遮断された環境の中で快適さだけを求めてつくられた新しい町。
- ウ 家族や友達に囲まれて生活する中であたたかさを感じるにぎやかな町。
- エ 広い世界へ出ていくことがあってもいつか帰ってきたいと思える美しい町。

問六 ―線部⑥「こぼこぼ。こぼこぼ。柔らかな音の向こうに、縞模様の入った栗色の魚が泳ぎ始める。魚は星屑の散らばる夜空を旋回し、星の描く三角形を潜っていった。ゆっくり、ゆっくりと。」は、「啓太」が誰のどのような姿を思い描いているのでしょうか。次の一文はその説明です。これについて後の問いに答えなさい。

（ A ）が、「烈子ばあちゃん」に（ B ）の気持ちを感じながら、（ C ）姿。

（1）（ A ）に入る人物を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 啓太
- イ 晴子
- ウ 啓太と晴子
- エ 晴子の家族

（2）（ B ）にあてはまる言葉を、本文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

（3）（ C ）にあてはまる言葉を、自分の言葉で五字以上、十字以内で答えなさい。

問七 ～線部 A～E の表現の説明として 適当でないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ～線部 A 「晴子は小さくぼとりと言葉を落とした。」という表現から「晴子」が寂しさや悲しみを感じながら「烈子ばあちゃん」のことを話し始めたことがわかる。
- イ ～線部 B 「雑音なく伝わる。」という表現から、「啓太」が、「晴子」の言葉を素直に受け取り、町の形を「すり鉢」のようだと感じていることがわかる。
- ウ ～線部 C 「晴子が目をぱちくりさせた。」という表現から、「チョコレートグラミー」について「啓太」が調べたことを知って「晴子」が困っていることがわかる。
- エ ～線部 D 「まるで昔話をするような口調」という表現からは「晴子」が「烈子ばあちゃん」の言葉だけでなくその声や様子も思い出しながら話そうとしていることがわかる。
- オ ～線部 E 「こぼりこぼりと気泡のように夜空に溶け込んでゆく。」という表現からは、「啓太」が「晴子」と話しているうちに自分も「晴子」も水槽の中にいる魚になったようだと感じていることがわかる。

